

『きみはいい子』

西松 優まよる

2015年

アークエンタテインメント 121分

監督 呉美保

原作 中脇初枝

脚本 高田亮

出演 高良健吾、尾野真千子、喜多道枝

池脇千鶴、富田靖子

呉美保監督は今回も社会問題をテーマに選び、認知症独居老人、知的障がい児を持つ母子家庭、児童虐待の親子連鎖、学校内でのいじめ、モンスターペアレント、学級崩壊等を織り込んだ。しかし、山本薩夫監督や今井正監督とは違い社会や政治を糾弾するのではなく、希望を持ったぬくもりのある作品に仕上げている。

この映画は、橋口亮輔監督の「恋人たち」同様3つの独立した物語が並行し交错しながら語られる。一つ目が孤独な認知症の独居老女あきこ（喜多道枝）が母子家庭の知的障がい児弘



也（加部亜門）と出会い、交流していく中で「疑似家族」に幸せを見つけていく物語。二つ目が幼少時に児童虐待を受け自分の娘にも虐待を繰り返す自己嫌悪に陥る主人公の主婦雅美（尾野真千子）を、自分も幼児虐待を受けたことのあるママ友陽子（池脇千鶴）が心に寄り添い抱きしめ雅美の気持ちが生浄化していく物語。3つ目は新任小学校男性教師岡野（高良健吾）が担任クラスのいじめ・学級崩壊・親の子への虐待と不登校に直面し嫌気がさし落ち込む中で、家族の年少の甥に「抱きしめられたこと」からヒントを得て、クラスを立て直し、親に虐待されている生徒神田を救おうと決意するまでの物語である。

岡野の姉が「私が子供にやさしくすると、子供は他人にやさしくしてくれるの」と話したり、「家族に抱きしめられてくること」という宿題をやってきた生徒たちが、ドキュメンタリータッチで「不思議な気持ち」と岡野にうれしそうに感想を答えたり、陽子が雅美に寄り添いながら『自分が救われた言葉、「べっぴんさん」と誰にでも言ってあげたい』と語らせている。結論的に言えば呉監督はスキンシップ（抱きしめたり、手を握る）や自分が人から受けた「うれしい気持ち」を自分の接する人たちに与えれば、親子・人間関係は大きく改善すると考えているように見える。あまりにシンプルな結論だが、人を信じ希望を持つことは大変大切なことであり私は呉監督の考えに賛成したいし、映画のラストをぬくもり

と希望を持って終わらせてくれたのはうれしかった。

3つの物語で共通しているのは同じ町に住んでいるのみである。頻繁に他の物語に場面転換したりオーバーラップを多用することによって3つの物語が関連づけられ、それなりに成功しているが、場の雰囲気や途切れやすく物語を2つくらいに絞り深掘りしたやり方もあったのでは……。下校を促す夕方の「夕焼け小焼け」のメロディーが校内に鳴り、鉄棒側から校舎と岡野を写し出し、親に虐待され不登校の神田を救おうと岡野が決意するシーンが印象的だ。老女の喜多道枝、ママ友の池脇千鶴の演技が光る。「さびしんぼう」の富田靖子の健在がうれしい。

